

特選
文部科学
大臣賞

2022

第20回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

カレーと豆ごはん ~気持ちを循環させるお金と経済のあり方

愛媛県・愛媛県立松山東高等学校 1年 兼頭 玄

「今年もお四国さんが無事できました。みんながまた1年元気に過ごせますよう。」
お堂でお礼の読経をするリョウコさんの背中を見ながら長い「お接待」の1日
を終える。

私のふるさととは瀬戸内海の離島、弓削島だ。島では毎年春に「島四国」という行事が催される。四国遍路巡礼を模して、島内外の参詣客が島内各所に設けられたお堂や祠^{ほくら}を巡るのだ。私は小さいころから、父母に連れられてお世話になっている大谷集落の「お接待」を手伝うのが習いとなっていた。「お接待」とは巡礼者に対して飲み物や食べ物を提供することで、四国遍路に昔からある文化であるが、「島四国」においても各集落やお寺でお菓子や飲み物がふるまわれるのだ。大谷は数軒しかない小さな集落だが、リョウコさんを中心に、豆ごはんと筍^{たけのこ}の煮物を炊いて島四国を巡る参詣者にふるまう。大谷のお接待は島の中でも群を抜いて人気があり、配膳が行われるお堂の前に行列ができることで知られた。私を含む子供たちの仕事は、もっぱらお茶を配ったり空いた茶わんや皿を下げたりというものだったが、朝から途切れることなく訪れる客の応対に目を回しそうになったものだ。丸く曲がったりリョウコさんの背中を見て、「なんでこんなに大変なことをボランティアでやるんだろう。」と不思議に思ったことがある。そんな私に父が話してくれた。

「四国遍路では、巡礼する時間を持ってない人たちが、自分の代わりにお遍路さんが回ってくれているんだという風に考えて、施しじゃなく、感謝の気持ちでお接待するんだよ。つまり、自分も他人も一体。お互い様ってわけだ。一番大変なりョウコさんがみんなの健康を願ってお接待を終えるのは、みんなの幸せを願うことが自分の幸せを願うことと同じだって感覚があるんじゃないかな。」

そう言われれば、島は何かと「お互い様」で成り立っている。集落ごとの祭りも、道普請も。過疎と高齢化によって年々できることが少なくなり、行事を続けるこ

とも大変になっているけれど、地域でみんなが支え合うことに対する協力を嫌がる人は少ないように思う。数年前の豪雨災害で土砂崩れや断水が起きた時、自然と集まって近隣の土砂のかき出しを手伝ったり、井戸を開放したり、もらい湯をしたりといった助け合いが島のあちこちで見られた。そこにはお金も、損得勘定も介在しない。

そんな島のお互い様文化が私は結構好きだ。

しかし新型コロナウイルスの影響で島四国も祭りも数年途絶えた中、私は今年島を離れた。松山の高校に通うため、一人暮らしを始めたのだ。

街での生活は、なるほどなかなか便利だ。物もサービスも、大概のものはお金があればだけれど手に入る。わずらわしい人間関係を作って助け合わなくても、助けはお金で買えるのだ。

便利で、わずらわしくもないのだが、何か物足りないような寂しいような気持ちを心のどこかで感じていた。もちろんレジで代金を払った後に、お店の人から「ありがとうございます。」と言ってもらって、こちらも「ありがとうございます。」と返すのだが、島で近所のおばちゃんに、採れた野菜をお裾分け頂く時の、「ありがとう。」と何かが違う気がしていた。

「お金が介在すると、気持ちが介在できなくなっちゃうのかな。」

そんな風に思い始めていたある日のことだ。

その日は休日で、島から父が様子を見に来ていた。お昼を外で食べようと、少し歩いて見つけたカレー屋さんに入った。ご主人は気さくな方で、特別にサービスしてくれたおかわりを皿に盛りながらこう言った。「来月の3のつく日にまた食べにおいで。」

奇数月の3のつく営業日は、学生は通常900円のカレーを400円で食べることができるというのだ。それは「愛有る大人から未来の君へ」と名付けられたお店のキャンペーンで、コロナ禍で勉強や生活に制限を受ける学生たちを、自身も学生時代に夢を追って苦労したご主人が、少しでも元気づけたいという思いで始めたのだそうだ。代金の差額は、キャンペーンの趣旨に共感した大人のお客さんの寄付によって賄われている。大人は差額の500円を払うだけでなく、学生たちへの応援メッセージを専用のカードに書く。そしてカレーを安く食べることでできた学生が、そのメッセージの隣に返礼のメッセージを書くという仕組みになって

いる。双方のメッセージが書かれた沢山のカードが店の壁に貼り付けられていた。

それを見た父が、早速新しいカードにメッセージを書き始めた。

店を出た後、父がこんな話をしてくれた。「奈良で、あるお店がやってる『みらいチケット』という仕組みを思い出したよ。偶然そのお店もカレー屋さんなんだけど。経済的事情などで食事が不十分な子供たちがお店の壁に貼られたチケットを使って、無料でカレーを食べられるんだ。そのチケットの代金を払うのが、やっぱりお店に来る地域の大人たちなんだよ。これからの未来を創る子供らのために、みんなができることをできる範囲です。その子供らがどこの誰であるかは関係ないんだよ。これはギブアンドテイクじゃない。ペイ・フォワード、恩送りの考えに近いかもね。」

都会にも「お互い様」ってあるんだな、と私は感じた。そして、お金は介在しているけど、そのお金には気持ちがちゃんと通っている、ということに気づいた。事実「みらいチケット」の取り組みでは、チケットでカレーを食べていた子供が、学校を出て就職したのちに、初任給でカレーを食べに来て、子供たちのために今度は自分がチケットを買って壁に貼って帰ったという。お金が気持ちを運んで、それが循環している。

今、世の中には、お金がないことで、生活を続けることが困難になったり、学びたくても学校に行けなかったりする人たちがいる。お金とは本来、その機能によって多様な社会的分業を促し、社会全体を豊かにするものであるはずだ。人が豊かに生きるための手段であるはずなのに、お金が人を苦しめている。時には自ら命を絶つところまで追い詰めることすらある。お金の本当の顔は巨大な悪魔なのだろうか。

いや、お金には生きた使い方というものがある。生かすかそうでないかは、使い方次第だ。お金が気持ちを循環させている二つのカレー屋さんの話から、私はそう確信した。

弓削島には、弓削商船高専という学校がある。前身は、120年以上も前に、人材を育成することで島を貧しさから脱却させようと、周辺の島民がお金を出し合っで設立した組合立の船員養成学校だ。自分たちの世代の損得ではなく、未来への恩送りによってできた学校と言ってよい。私は、自分の育った島がそんな歴史を持っていることに誇りを感じる。

きっと同じような成り立ちを持つ学校は他にもあるに違いない。学校だけでなく事業組織に目を向けても、協同組合や相互銀行、保険会社といった事業体の多くは、もともと人々の支え合いから出発したものだろう。日本は江戸時代に農本経済から貨幣経済へと移行したと言われるが、その時代にはすでに「頼母子講」といったお金による支え合いの仕組みがあった。やはり、お金は決して奪い合ったり、人を苦しめたりするための手段ではなかったのだ。社会経済が高度に発達して、分業が多様化、複雑化する中で、そのことが見えにくくなってしまったのかもしれない。

もう一度全ての人にとってお金が、奪い合うのではなく支え合う手段として、人を苦しめるのではなく幸せにする手段として機能する社会を作りたい。私はそう思った。

今はまだ、誰かの気持ちのバトンを受け取って、カレーを食べている側である。

しかし、いつかは先人の知恵に学び、生きたお金の循環する恩送りの仕組みを作れないかと思案している。困っている人、学びたい人、志を実現したい人が、クラウドファンディングを成功させるノウハウがなくても、銀行の厳格な審査基準をクリアする条件を備えてなくても、前に進むアシストを当たり前で得ることのできる仕組み。そんな仕組みを、共感によって集まった人々が、金額の多寡は関係なく、自分の気持ちに乗せたお金を持ち寄って作り上げる。仮称「お接待ネットワーク」だ。「お接待ネットワーク」では、お金の限らず、物でもサービスでも、みんなができることをできる範囲で持ち寄って当たり前で支え合う。前述「みらいチケット」でも、大学生や先生が、お金の代わりに子供らにボランティアで勉強を教えているそうだ。

お金のために生活に不安を抱く人がいる社会ではなく、お金によって全ての人々が不安なく生活を送ることのできる社会。お金のために学びを諦める社会ではなく、お金によって学びたいことを心おきなく学び、その成果を世の中に役立てることのできる社会。

そんな社会を私たちが力を合わせて作り上げることができたならば、人々は意欲を持って学び働くことができ、社会全体が活力にあふれ、生きたお金が循環し、人々の幸福の拡大再生産が始まると思うのだ。まさにそれは、みんなの幸せが自分の幸せと同意であることを実感できる社会だ。

私は次にカレーを食べに行ける日を探してカレンダーとにらめっこしている。
いつか OSETTAI が世界の常識になって、そのことを大谷の人たちと喜び合う日
が来るのを思い浮かべながら。

